

組織の経済学の歴史

慶應義塾大学 経済学部
川俣雅弘

アブストラクト

組織の経済学は、非対称情報をもたらすインセンティブ両立性の問題、モラル・ハザードや逆選択などの問題、市場と企業の境界を取引費用によって説明するという考え方、企業経営上の問題などに起源がある。ところが、これらの問題は1930年代には認識されていたが、理論にもとづいて解決されていくのは1970年代以降である。それは、非対称情報をもたらすインセンティブの問題を分析するメカニズム・デザイン理論、モラル・ハザードや逆選択などの問題を分析する契約理論の展開により可能となった。契約理論は、プリンシパル・エージェント・モデルにおいて非対称情報をもたらす問題を解決するメカニズムを設計する理論として成立した。さらに、契約理論は取引費用の経済学に応用され、不完備契約の理論にもとづいて取引費用の経済学の形式化、財産権理論とインセンティブ・システム・アプローチをもたらした。不完備契約の理論の観点から、商品の市場は取引される商品の契約が完備であり、その契約が社会的に共有されているときに成立すると見なせる。